



平成25年10月22日
内閣府（防災担当）

南海トラフの巨大地震モデル検討会（第39回）及び 首都直下地震モデル検討会（第21回）合同会議 議事概要について

1. 検討会の概要

日時：平成25年6月28日（金） 10:00～12:00

場所：中央合同庁舎第3号館 防災A会議室

出席者：入倉委員、金田委員、橋本委員、平原委員、福和委員、古村委員、翠川委員、山崎委員の南海トラフの巨大地震モデル検討会各委員
武村委員、平田委員、福和委員、古村委員、翠川委員、山崎委員の首都直下地震モデル検討会各委員

2. 議事概要

最大クラスの強震断層モデルの長周期地震動の計算手法などについて事務局から説明を聴取し、委員間で議論を行った。今回の議事の概要は次のとおり。

【南海トラフの巨大地震モデル】

○今回の5地震重ね合せ震度と前回の2003年度想定震度の比較で、国レベルで見れば二つに良い相関があるかもしれないが、県レベルで見れば前回より大きくなったり、小さくなったり大きく変わっているようだ。どのパラメーターの変更による影響が大きいのかについて丁寧な説明が必要ではないか。

○今回の改定モデルによる想定震度等については幅がある。これから各県で被害予測計算をするようなときには、乱数の与え方で結果の変動があるということと一緒に情報提供すべき。

○深度について今回と2003年の比較では、今回の震源近傍の値が小さめになっている。C値とかエンベロープ関数を変更したことが効いているのではないか。いろいろ分析して説明すべき。

【首都直下地震モデル】

○ある程度地震が大きくならなければ活断層も認識できないわけから、その長さやMjの関係を使うのならば、ある程度大きな地震で関係式を検討する必要がある。

○断層が見えるものと見えないもので地震の特性が違うのではないかという観点での整理も必要。

【関東地震の再現】

- 地殻変動を計算する上でスリップベクトルの方向は全部一定なのか。フィリピン海プレートの動く方向になっているのか。
- 震度の再現性が悪い箇所は、微地形区分に基づき判定した平均的なAVS30を用いて表層地盤での震度増分を算定することで、平均よりも揺れやすい地盤で現実の特性を反映できていないからかもしれない。また液状化が起こって被害が拡大した可能性もあり、幾つかの要因は考えられると思う。

【長周期地震動】

- $V_s=350\text{m/s}$ の工学基盤層での波形を求めているようだが、建物に入る入力地震動は工学的基盤の入力が入るわけではなくて、さらに表層まで入った入力が入ってくるものであるから、建物への共振を考えるのだったら、浅い部分の周期も考慮すべきでないか。
- 周期の変動性について、例えば関東平野の北のほうから来るときと、西から来るときとで周期が違うのかとか、浅い地震と深い地震で違うのかどうかを分析してはどうか。

<本件問い合わせ先>

内閣府政策統括官（防災担当）付

調査・企画担当参事官 藤山 秀章

同企画官 中込 淳

同参事官補佐 平 祐太郎

TEL : 03-3501-5693（直通） FAX : 03-3501-5199